

作物名：キャベツ

病害虫名：べと病（病原：*Peronospora parasitica*）



葉表の病斑



病斑の裏側

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・主に葉に発生する。はじめ下葉から発生し、葉脈間に淡黄褐色、不定形の病斑を生じる。
- ・病斑は不揃いで、形は葉脈に区切られた多角形のものもあるが、はくさいのべと病ほど明瞭でない。病斑の裏側はややへこんだ褐色え死斑が互いに融合しており、汚白色、霜状のかびが生える。病斑が古くなるとかびは褐色になってやがて消失する。
- ・株全体が枯死することはないが、下葉に激発すると結球内部の茎まで侵されることがある。
- ・比較的気温が低く、降雨の続く春と秋に発生する。
- ・苗床で発芽直後の幼苗に発生すると、子葉の裏側に汚白色のかびが密生し枯死することがある。

2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は被害株の根の中で菌糸の形で潜在し、また卵胞子の形で土中越冬する。気温が3～25℃になって降雨があると、分生子を形成して空气中に飛散し一次伝染する。
- ・被害植物の病斑上に形成された分生子が飛散し、キャベツの葉上に落下すると水滴の存在によって発芽し、菌糸が細胞間の境目や気孔から侵入して二次伝染を繰り返す。
- ・種皮の隙間に菌糸の形で生存し、種子伝染する場合もある。
- ・本菌には寄生性の分化がみられ、キャベツを侵す菌はブロッコリー、カリフラワーに感染するがだいこん、はくさいには感染しない。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で鞭毛菌類に属し、分生子と卵胞子を形成する。分生子の形成適温は8～10℃、発芽適温は8～12℃である。また、菌糸の生育適温は7～13℃である。卵胞子は休眠性で寄主植物が腐敗しても休眠状態で土中で生存を続け、中には約5年間生き残る場合がある。
- ・本病菌の分生子は遊走子を形成しない。
- ・発病適温は10～15℃で、湿度が高く、昼間24℃以下、夜間8～16℃の時に発生しやすい。
- ・感染には9時間以上の濡れ時間が必要で、濡れ時間が長いほど感染率が高まり発病が増加する。
- ・キャベツを含め、アブラナ科野菜の連作ほ場では発生が多い。
- ・低湿地に発生が多く、窒素過多やリン酸が少なくカリが多いほ場では発生が多い。

4 防除対策

- ・発病株は伝染源となるので、見つけ次第、ほ場外に持ち出し土中深くに埋設する。
- ・栽培ほ場は、排水を良好にするともに、密植を避け通風を良くする。
- ・窒素過多や肥料切れは発病を助長させるので、適切な肥培管理を行う。
- ・薬剤防除は結球初期まで予防主体に行い、発病を認めた場合は、発生初期に薬剤散布を行う。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編3-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編3（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影